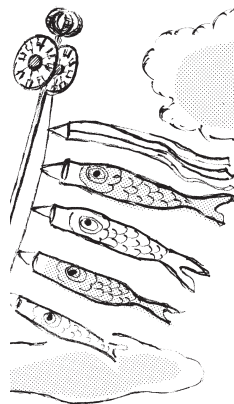
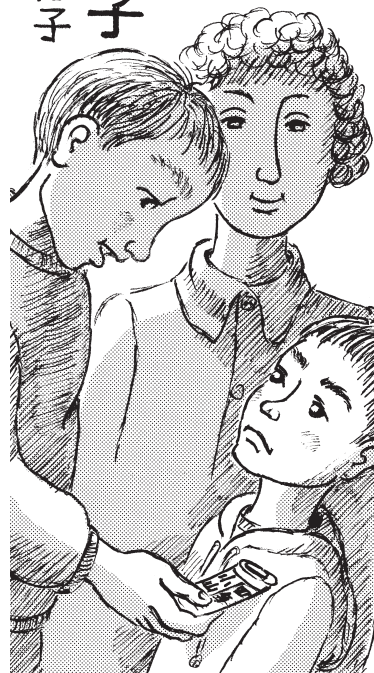


高く泳ぐや



中村真里子
え・入村定子



「一回きりです。いつにしますか？」

テンちゃんが聞いた。

「……十年。十年後かな」

ちよっと考えてから、俺は答えた。

◆ ああ、僕もう学校やめたいな。

和人はため息をついて、川に石を投げこんだ。

新学期はまだ始まったばかりだ。

和人の通う小学校も、和人とお母さんが住むアパートも、市内を流れる一番大きな川の近くにある。

和人は、今日は川ぞいに帰って来たのだ。そして、今、河川敷のベンチにすわって川に石なんか投げている。

「ふう」

もうひとつ石を拾って顔を上げると、対岸の家の屋根のむこうにこいのぼりが見えた。黒。赤。青。てっぺんで矢車がきらきら光っている。

もうすぐ五月になるんだな。

来週からは、この河川敷でこいのぼりフェスティバルが開かれる。そのときは千匹のこいのぼりが空に泳ぐのだ。小さいころ、お母さんと一緒に見に来たとき、大喜びの和人に、お母さんはいたずらをささやくみたいに言った。

「これ全部、和人にあげる」

「ほんと?!」

「ほんとよ。でも、うちはせまいアパートだからさ、また来年まで市役所の人にあずかっておいてもらおうよ、ね? そして、他の人たちにも見せてあげようね」